

中央大学ビジネススクール
DBAプログラム(博士後期課程)



中央大学大学院 戦略経営研究科
ビジネス科学専攻
(博士後期課程)

目 次

授業科目担当者一覧	・・・・・・・・ 2
カリキュラムマップと科目ナンバリング	・・・・・・・・ 3
講義要項	・・・・・・・・ 6

※2025年度の学年暦や授業時間については「授業時間割」をご確認ください。

授業科目担当者一覧

リサーチメソッド

統計学	休講科目	
ファイナンス統計	休講科目	
社会調査法 ※	小熊 信	6
研究方法論基礎 ※	竹田 陽子	9

※: MBAと合併開講科目です。

講義

経営戦略特別研究(経営組織論)	犬飼 知徳	11
経営戦略特別研究(知識創造戦略論)	遠山 亮子	12
経営戦略特別研究(イノベーション戦略と組織)	竹田 陽子	13
経営戦略特別研究(戦略と組織)	露木恵美子	15
経営戦略特別研究(アントレプレナーシップ論)	新藤 晴臣	17
経営戦略特別研究 (アントレプレナーシップとビジネスプランニング) ※	新藤 晴臣	19
経営戦略特別研究(経営戦略とイノベーション)	生稲 史彦	22
経営戦略特別研究(ヘルスケアマネジメント)	真野 俊樹	23
戦略経営特別研究フィールドラーニング (グローバル・イノベーション: 米国シリコンバレー) ※	犬飼 知徳 高村 静 宇田川博文	25
戦略経営特別研究フィールドラーニング (グローバル・イノベーション: ベトナム) ※	中村 博 金 雲鎬	28
マーケティング特別研究(流通論)	中村 博	31
マーケティング特別研究(マーケティング・サイエンス)	阿部 誠	32
マーケティング特別研究(マーケティング戦略)	金 雲鎬	33
人的資源管理特別研究(企業経営と人的資源管理)	島貫 智行	34
人的資源管理特別研究(職場マネジメントとキャリア形成)	高村 静	35
ファイナンス特別研究(コーポレート・ファイナンスと企業戦略)	大野 薫	36
ファイナンス特別研究(インベストメント)	大野 薫	37
経営法務特別研究(金融取引法務)	杉浦 宣彦	38

論文

研究指導I・II・III		40
--------------	--	----

阿部 誠、生稲 史彦、石島 博、犬飼 知徳、金 雲鎬、島貫 智行、新藤 晴臣、杉浦 宣彦、
高村 静、竹田 陽子、露木恵美子、遠山 亮子、中村 博、真野 俊樹、杉浦 宣彦

カリキュラムマップについて

カリキュラムマップとは、ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）に基づき、各科目が、卒業までに身につけるべき能力のどの項目と関連するのか、学習成果の達成にどの授業科目が寄与するかを示したものです。

◎最も強く関連、○強く関連、△やや関連

ナンバリング	区分	科目名	戦略経営に関する学術的知見	研究方法論に関する深い理解	実務上の課題を設定し解決する能力	体系化された研究を実行できる知識・能力
BS-MN6-1011	リサーチメソッド	統計学		○		
BS-MN6-1411	リサーチメソッド	ファイナンス統計		○		
BS-MN6-1012	リサーチメソッド	社会調査法		○	○	○
BS-MN6-1013	リサーチメソッド	研究方法論基礎		○		○
BS-MN6-2111	講義	経営戦略特別研究(経営組織論)	○		○	
BS-MN6-2112	講義	経営戦略特別研究(知識創造戦略論)	○		○	
BS-MN6-2113	講義	経営戦略特別研究(イノベーション戦略と組織)	○		○	
BS-MN6-2114	講義	経営戦略特別研究(戦略と組織)	○		○	
BS-MN6-2115	講義	経営戦略特別研究(アントレプレナーシップ論)	○		○	
BS-MN6-2116	講義	経営戦略特別研究(アントレプレナーシップとビジネスプランニング)	○		○	
BS-MN6-2117	講義	経営戦略特別研究(ヘルスケアマネジメント)	○		○	
BS-MN6-2118	講義	戦略経営特別研究フィールドラーニング(グローバル・イノベーション:米国シリコンバレー)	○		○	
BS-MN6-2119	講義	戦略経営特別研究フィールドラーニング(グローバル・イノベーション:ベトナム)	○		○	
BS-MN6-2211	講義	マーケティング特別研究(流通論)	○		○	
BS-MN6-2212	講義	マーケティング特別研究(マーケティング・サイエンス)	○		○	
BS-MN6-2213	講義	マーケティング特別研究(マーケティング戦略)	○		○	
BS-MN6-2311	講義	人的資源特別研究(人的資源管理論)	○		○	
BS-MN6-2312	講義	人的資源特別研究(職場マネジメントとキャリア形成)	○		○	

BS-MN6-2411	講義	ファイナンス特別研究(コーポレート・ファイナンスと企業戦略)	○		○	
BS-MN6-2412	講義	ファイナンス特別研究(インベストメント)	○		○	
BS-MN6-2511	講義	経営法務特別研究(金融取引法務)	○		○	
BS-MN6-3001	論文	論文(研究指導I)	○	○	○	○
BS-MN6-3002	論文	論文(研究指導II)	○	○	○	○
BS-MN6-3003	論文	論文(研究指導III)	○	○	○	○

戦略経営研究科における科目ナンバリング採番ルール

AB-CD1-2345

① 学部・研究科 AB 英字	(ハイフン)	② 分野コード CD 英字	③ レベル 1 数字	(ハイフン)	④ 識別コード(1) 2	⑤ 識別コード(2) 3	⑥ 識別コード(3) 4	⑦ 識別コード(4) 5
-------------------------	--------	------------------------	---------------------	--------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------

英数字

全学共通コード表に基づいて採番

各組織の任意コードで採番
(授業形態を表示させる組織は「識別コード(4)」を使用し、授業形態コード表に基づいて採番する)

※英字については、すべて「大文字」とする。

【BS-MN6-2111】

- ① 学部：研究科：「BS」 戦略経営研究科 Chuo Graduate School of Strategic Management
- ② 分野コード：「MN」 経営学 Management
- ③ レベルコード：「5」 【大学院】修士課程・専門職学位課程
(Graduate)Master's Course/Professional degree
「6」 【大学院】博士後期課程 (Graduate)Doctoral Course

<戦略経営研究科における識別コード(1)～(4)の採番ルール>

■科目区分名 ④【識別コード(1)】

以下の表の通り、「科目区分名」を示します。

識別コード(1)	科目区分名	英語名称
1	リサーチメソッド	Methodology
2	講義	Lecture
3	論文	Dissertation

■分野名 ⑤【識別コード(2)】

以下の表の通り、「分野名」を示します。

識別コード(2)	分野名	英語名称
0	共通	Common
1	戦略	Strategy
2	マーケティング	Marketing
3	人的資源管理	Human Resource Management
4	ファイナンス	Finance
5	経営法務	Management Legal Affairs

■履修形態 ⑥⑦【識別コード(3)～(4)】

以下の表の通り、科目ごとの個別の通し番号を、「履修形態」として2桁の数字で示します。

識別コード(3)(4)	履修形態	英語名称
01～	必修科目	Compulsory
11～	選択必修科目	Compulsory Electives
51～	選択科目	Electives

科 目 名	社会調査法（MBA 合併科目）
担 当 者	小熊 信
履 修 条 件	アンケート調査を用いた論文の執筆を予定している学生を主な対象とする。。
科 目 の 目 的 ・ 到 達 目 標	<p><科目の目的> 社会調査はデータを適切に集め、正しく解釈するための方法論である。本講義では、社会調査の方法論について理解するとともに、みずから社会調査を実践できるようになることを目指す。</p> <p><到達目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会調査の方法論、調査手法について理解し、調査・研究の実施計画を立てられるようになる。 ・データの基礎的な集計手法を学ぶとともに、誤差など統計的な概念について理解する。 ・多変量解析などの分析手法を理解し、実施できるようになる。 <p>この科目では7つの能力のうち以下の能力の涵養を目指す： ◎1：問題発見・解決力、◎3：現状理解力</p>
概 要	本講義では社会調査の方法論、調査方法を講義するとともに、調査票の作成、サンプリング、データ整理、基礎的集計、そして、データをより深く理解するための多変量解析など、量的調査を中心に、調査の実施、分析に必要な一連のプロセスについて紹介していく。また、社会調査のスキル習得には実践が不可欠である。授業では、演習、ディスカッションなどの実践を通じて多面的な理解を深めるとともに、統計ソフトを使った実習も行う。
授 業 計 画	第1回 社会調査とは 第2回 社会調査の種類 第3回 社会調査のプロセス 第4回 実査の方法 第5回 調査票作成の考え方 第6回 調査票の作成【実習】 第7回 データの電子ファイル化 第8回 データの基礎的集計【実習】 第9回 統計的推測 第10回 変数間の関連【実習】 第11回 単回帰分析・重回帰分析【実習】 第12回 主成分分析・因子分析【実習】 第13回 ロジスティック回帰分析【実習】 第14回 テキストマイニング【実習】

	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の実務経験（職歴、本務先）と授業との関連性 2006 年から現在に至るまで労働研究のシンクタンクである労働調査協会において、働き方、生活に関する量的調査、質的調査の両方の実務（企画、実施、分析）に従事してきた。授業では社会調査の実務経験を活かした授業を行い、研究や仕事において社会調査を実践できる能力を身に付けさせる。 ・アクティブ・ラーニング要素 <input checked="" type="checkbox"/> ディスカッション、<input checked="" type="checkbox"/> グループワーク、<input checked="" type="checkbox"/> プレゼンテーション、<input checked="" type="checkbox"/> 実習、 <input type="checkbox"/> フィールドワーク、 <input type="checkbox"/> PBL（課題解決型学習）、<input type="checkbox"/> 反転授業（教育の中で行う授業学習と課題などの学習外学習を入れ替えた学習形式 <input type="checkbox"/> ディベート <input type="checkbox"/> その他（ ）、<input type="checkbox"/> 実施していない ・授業における ICT の活用方法や双方型授業の実施 <input type="checkbox"/> 平日夜間オンライン授業：ZOOM <input checked="" type="checkbox"/> 土日対面授業実施 <input type="checkbox"/> クリッカー、<input type="checkbox"/> タブレット端末、<input type="checkbox"/> その他（ ）
成績評価の基準と方法	<ul style="list-style-type: none"> ・成績評価の方法 <input checked="" type="checkbox"/> 課題レポート 20% <input checked="" type="checkbox"/> 授業内での挙手発言 10% <input checked="" type="checkbox"/> プレゼンテーション 10% <input checked="" type="checkbox"/> 最終レポート 60% 合計 100% ※出席は前提であり、出席だけでは評価点となりません。 ・評価基準 課題レポート：授業内容に対する理解度を評価する。 授業内での挙手発言：授業における発言の頻度と内容にもとづいて評価する。 プレゼンテーション：発表内容の説得性、ユニークさを評価する。 最終レポート：社会調査の方法論への理解度、分析の深さ、考察における独自性を評価する。 ・課題（中間試験やレポート等）に対するフィードバックの方法 <input checked="" type="checkbox"/> 授業時間内で講評・解説の時間を設ける ・授業で使用する言語 <input checked="" type="checkbox"/> 日本語 <input type="checkbox"/> 英語 <input type="checkbox"/>（その他）

<p>テキスト・参考文献等</p>	<p>テキスト：なし (各回ごとに資料を配布する)</p> <p><参考文献> 轟・杉野・平沢編「入門・社会調査法」法律文化社、2010年 大森・阪田・宿久「R Commanderによるデータ解析 第2版」、共立出版、2014年 杉野「入門・社会統計学: 2ステップで基礎から[Rで]学ぶ」法律文化社、2017年</p>
<p>特記事項</p>	<p>教材の配布の方法について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業開始前～履修申請期間は C plus の「講義照会」にアップロードする。 ・履修確定後は「教材配布」にアップロードする。 ・授業日の3日前までにアップロードする。 <p>課題・宿題の課題テーマの提示について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業ごとの課題・宿題については、締め切り1週間前までには、課題テーマを提示する。 <p>準備学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義で出た課題については必ず取り組むこと <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の後半では実習で各自所有のノートPCを利用します。Excelのほかに、フリーの統計ソフトであるRを利用します。

科 目 名	研究方法論基礎 (MBA 合併科目)
担 当 者	竹田 陽子
履 修 条 件	論文の執筆を予定している学生、論文の執筆に関心のある学生を主な対象とする。
科 目 の 目 的 ・ 到 達 目 標	<p>科目の目的：論文執筆をはじめ学術的な研究活動に取り組むために、必要な研究方法論の基本的な考え方を身につける。</p> <p>到達目標：研究方法論やリサーチ・デザインについて理解を深め、研究方法論の基本的な考え方を身につける。</p> <p>この科目では7つの能力のうち以下の能力の涵養を目指す:◎1：問題発見・解決力、◎3：現状理解力</p>
概 要	<p>経営環境がめまぐるしく変化するビジネスの現場においては、既存のビジネスの経験や知識だけでは対応困難な事象が次々と現れている。そのため、ビジネススクールに所属する実務家学生も既存知識を身につけるだけでなく、論文の執筆等研究活動を通じて新しい知識を創造する必要性が少なくない。ただし、リサーチによって新しい知識を創造するためには、適切な研究方法論の基礎を持ちながらリサーチをデザインし、適切な手続きを踏んでいく必要がある。本科目は、リサーチのプロセスにおいて必要な研究方法論の基本的な考え方を、既存論文の分析と自らの研究課題についての研究プロポーザル作成を通じて学ぶ。</p>
授 業 計 画	<p>第1回 インTRODクシヨN</p> <p>第2回 リサーチのデザインとは何か</p> <p>第3回 リサーチ・クエスチヨNの設定</p> <p>第4回 良い研究とは何か</p> <p>第5回 文献のレビューとは何か</p> <p>第6回 文献レビューの構造</p> <p>第7回 理論とは何か</p> <p>第8回 研究方法の選択</p> <p>第9回 理論と操作定義</p> <p>第10回 事例研究の方法</p> <p>第11回 研究論文の査読: 論文の構造と妥当性の評価</p> <p>第12回 研究論文の査読: 面白い研究とは何か</p> <p>第13回 研究プロポーザルの発表</p> <p>第14回 まとめ: より良い研究に向けて</p> <p>授業の進捗により、スケジュールを変更することがある</p> <p>・アクティブ・ラーニング要素</p> <p>■ディスカッション、■グループワーク、■プレゼンテーション、□実習、□フィールドワーク、□PBL (課題解決型学習)、□反転授業 (教育の中で行</p>

	<p>う授業学習と課題などの学習外学習を入れ替えた学習形式、<input type="checkbox"/>ディベート、<input type="checkbox"/>その他（ ）、<input type="checkbox"/>実施していない</p> <p>・（ICT を活用した）双方型授業の実施</p> <p>■平日夜間オンライン授業：ZOOM</p> <p><input type="checkbox"/>土日対面授業実施</p> <p><input type="checkbox"/>クリッカー、<input type="checkbox"/>タブレット端末、<input type="checkbox"/>その他（ ）</p>
成績評価の基準と方法	<p>・成績評価の方法</p> <p>■課題発表 40%</p> <p>評価基準：学習事項の理解度</p> <p>■研究プロポーザル発表 60%</p> <p>評価基準：学習事項の理解度、リサーチ・デザインの適切さ</p> <p>合計 100%</p> <p>※出席は前提であり、出席だけでは評価点となりません。</p> <p>・課題・研究プロポーザルに対するフィードバックの方法</p> <p>■発表時にフィードバックをおこなう。後日の個別フィードバックも可。</p> <p>・授業で使用する言語</p> <p>■日本語 <input type="checkbox"/>英語 <input type="checkbox"/>（その他）</p>
テキスト・参考文献等	<p>教材：リサーチデザイン分析の演習対象になる研究論文を講義開始時に提示する</p> <p>参考文献：</p> <p>藤本隆宏・高橋伸夫・新宅純二郎・阿部誠・粕谷誠 『リサーチ・マインド経営学研究法』 有斐閣</p> <p>田村正紀 『リサーチ・デザイン』 白桃書房</p> <p>その他授業中に適宜紹介する</p>
特記事項	<p>教材配布の方法について</p> <p>・ 授業開始前～履修申請期間は、「講義照会」で配布する。</p> <p>・ 履修確定後は、C-Plus の「教材配布」で配布する。</p> <p>課題の提示について</p> <p>・ 授業ごとの事前課題については、締め切り 1 週間前までには提示する。</p> <p>予習について</p> <p>・ 事前課題をよく準備すること</p> <p>研究プロポーザル発表について</p> <p>・ 最終発表に向けて早めに準備すること。</p>

科目名	経営戦略特別研究（経営組織論）
担当者	犬飼 知徳
目的	DBA の博士論文を執筆するために組織論研究の基本文献から最新研究までの「流れ」を理解する。
概要	受講者には、経営組織論の研究を行う上での必読文献を読み、レジюмеを作成してもらい、そのレジюмеをもとに講義中は組織論研究におけるその論文の意義や内容に関する批判的検討を行う。
到達目標	経営組織論の学術的な流れや位置付けを理解できる。 経営学の論文を書くために組織論のレビューを行うことができる。
成績評価の基準と方法	毎回のレジюме提出と教室における貢献度（発言など）
履修条件	特になし。
<p>授業内容</p> <p>第1回 インTRODクシヨン:経営組織論とは何を学ぶ学問か</p> <p>第2回～第11回は、Pugh, Derek S. and David J. Hickson(2007), <i>Writers on Organizations(6th edhition)</i>, Thousand Oaks; CA, Sage Publications, Inc. の各章を講読する。</p> <p>第2回 組織構造(Max Weber - Alfred D. Chandler)</p> <p>第3回 組織構造(Oliver E. Williamson - Chirstpher Bartlett and Sumantra Ghoshal)</p> <p>第4回 組織とその環境(Tom Burns - Jeffrey Pfeffer and Gerald R. Salancik)</p> <p>第5回 組織とその環境(Raymond E. Miles and Charles C. Snow)</p> <p>第6回 組織とその環境(michael T. Hannan and John Freeman)</p> <p>第7回 組織におけるマネジメントと意思決定(Henri Fayol- Peter F. Drucker)</p> <p>第8回 組織におけるマネジメントと意思決定(Michael Foucault- Karl E. Weick)</p> <p>第9回 組織内の人々 (Elton Mayo and the Hawthorne Investigations- Edgar Schein)</p> <p>第10回 組織内の人々 (Frederick Herzberg- Rosabeth Moss Kanter)</p> <p>第11回 組織変化と組織学習 (Paul J. DiMaggio an d Walter W. Powell- Chris Argyris)</p> <p>第12回 組織変化と組織学習 (Peter Senge- Gareth Morgan)</p> <p>第13回 最新の組織論の文献① (ASQ, OS などから犬飼が指定する)</p> <p>第14回 ラップアップ</p>	
テキスト・参考文献等	上記文献
その他特記事項	特になし。

科目名	経営戦略特別研究（知識創造戦略論）
担当者	遠山 亮子
目的	知識経営に関する諸論を学び、その基本コンセプトを英語で理解すること。
概要	知識経営論に関連する英語文献を輪読する。担当レポーターは論文をレジюмеにまとめた上で発表し、それに基づいて議論を行う。
到達目標	知識と知識経営に関する様々な学説について、基本コンセプトを英語で理解し表現できるようになること。
成績評価の基準と方法	期末レポート 70%、クラス貢献 30%。
履修条件	MBA コースにて知識創造戦略論を履修が望ましい。
<p>授業内容</p> <p>第1回 What is knowledge</p> <p>第2回 Tacit and explicit knowledge 1</p> <p>第3回 Tacit and explicit knowledge 2</p> <p>第4回 Knowledge-creating theory</p> <p>第5回 Knowledge and resource-based view 1</p> <p>第6回 Knowledge and resource-based view 2</p> <p>第7回 Knowledge and strategy 1</p> <p>第8回 Knowledge and strategy 2</p> <p>第9回 Knowledge and organization 1</p> <p>第10回 Knowledge and organization 2</p> <p>第11回 Knowledge and leadership 1</p> <p>第12回 Knowledge and leadership 2</p> <p>第13回 Knowledge and networks 1</p> <p>第14回 Knowledge and networks 2、Conclusion</p>	
テキスト・参考文献等	輪読する論文に関しては第1回の講義で指定する。
その他特記事項	

科目名	経営戦略特別研究（イノベーション戦略と組織）
担当者	竹田 陽子
目的	学術論文を執筆するために、イノベーションの戦略と組織についての研究蓄積の流れを理解し、文献レビューの書き方、文献の探索の仕方を習得することを目的とする。
概要	本授業は、イノベーションの戦略と組織についての研究蓄積を網羅的扱う。受講生は、毎回テキストおよび指定された文献に関してレジュメを作り、授業中に発表する。また、受講生は研究テーマを一つ選び、テーマに関する先行研究レビューを自ら行って、最終レポートとして提出する。先行研究レビューの方法については、授業中に指導するが、文献の探索は自らおこなう。英語の論文を読むことが必要になる。
到達目標	イノベーションの戦略と組織についての研究蓄積の流れを理解する。 学術論文を書くために先行研究を探索し、構造的に整理し、創造的なレビューを行うことができる。
成績評価の基準と方法	毎回の授業における発表 50% 毎回のテーマのテキスト該当章と指定された文献(英語論文も含む)を事前に読み、レジュメを作り、授業中に発表する。準備の完成度と発表内容の思考の緻密さ、視点の独自性を評価する。 最終レポート 50% イノベーションの戦略と組織についてのテーマを一つ選び、先行研究レビューを行う。レポートの完成度と思考の緻密さ、視点の独自性を評価する。
履修条件	特になし
<p>授業内容</p> <p>第1回 イノベーションのタイプ</p> <p>第2回 破壊的技術、探索と深化</p> <p>第3回 イノベーションのプロセス</p> <p>第4回 新製品開発</p> <p>第5回 イノベーション戦略</p> <p>第6回 国のイノベーション・システム、産業クラスター</p> <p>第7回 技術軌道</p> <p>第8回 研究開発組織</p> <p>第9回 市場からの学習と普及</p> <p>第10回 オープンイノベーション:インバウンド</p> <p>第11回 オープンイノベーション:アウトバウンド</p> <p>第12回 イノベティブな組織</p> <p>第13回 イノベティブな企業の創造</p> <p>第14回 授業全体、最終レポートについての質疑</p> <p>※授業予定は、進捗の状態等によって変更があります。</p>	

<p>テキスト・ 参考文献等</p>	<p>テキスト</p> <p>Tidd, J., Bessant, Pavitt, K. <i>Managing Innovation: Integrating Technological, Market and Organization Change</i>. (邦訳:イノベーションの経営学. NTT 出版)</p> <p>参考文献:</p> <p>Burgelman, R.A., Christensen, C. M., and Wheelwright, S.C. <i>Strategic Management of Technology and Innovation</i>. McGraw-Hill. (邦訳:技術とイノベーションの戦略的マネジメント 上・下 翔泳社)</p> <p>一橋大学イノベーション研究センター編.イノベーション・マネジメント入門.日本経済新聞社.</p> <p>テキストに引用されている諸論文</p> <p>その他、授業時に紹介する。</p>
<p>その他 特記事項</p>	<p>毎回の授業の発表準備のため、テキストの該当章と指定された文献(英語論文も含む)を読み、レジユメを作成する必要がある。授業で指定された文献の他にも、学期の初めから最終レポートに向けて、文献を自ら読み進める。</p>

科目名	経営戦略特別研究（戦略と組織）
担当者	露木 恵美子
目的	企業にとって、戦略と組織をどう設計し運営するかは非常に重要な問題である。それは、言い換えれば、企業理念—戦略—組織—経営資源をいかに整合させるかという問題でもある。現代企業の大きな問題は、戦略と組織の不一致にある。このような問題意識の下で、組織論の基礎を習得し、それを個別の事例研究にあてはめ応用できるようになることを目的とする。
概要	本講義の中心テーマは、企業戦略と組織構造との適合関係である。企業は市場環境の変化に伴って戦略を変えていく。それは同時に、その企業戦略にあった組織構造に組織を再編成していく必然性が生じるということでもある。逆に、組織の構造や事業プロセスが新たな戦略を創発することもある。戦略と組織が市場に適合しなければ、管理効率が低減し、企業業績に悪い影響を与える、というのがチャンドラーの命題「組織は戦略に従う」の含意であった。本講義では、組織論の古典を学習した上で、ガルブレイスの組織設計におけるスターモデルを用いて組織分析を行う。
到達目標	理論で学んだことを、具体的な企業の事例に当てはめて考え、その成否の妥当性を検討し、さらに自社あるいは他社のケースについて問題点や課題を抽出・分析し、改善案を提示することを最終目標とする。
成績評価の基準と方法	レポート 50% グループワークおよびディスカッションでの貢献度 20% 個人課題 30%
履修条件	「経営戦略論基礎」を履修済み、あるいは免除されていることが望ましい。
<p>授業内容</p> <p>第1回 イン트로ダクション:組織とは何か?</p> <p>第2回 組織論の起源(1):テーラーリズム</p> <p>第3回 組織論の起源(2):ホーソン実験と人間関係学派</p> <p>第4回 組織論の起源(3):グループダイナミクス</p> <p>第5回 現代企業における組織デザイン(1):分業と標準化</p> <p>第6回 現代企業における組織デザイン(2):ヒエラルキーと意思決定</p> <p>第7回 「組織は戦略に従う」(1):多角化戦略と事業部制</p> <p>第8回 「組織は戦略に従う」(2):4つのケーススタディ</p> <p>第9回 事例研究(1):組織変革の事例</p> <p>第10回 事例研究(2):組織変革の事例</p> <p>第11回 事例研究(3):組織の市場適応の事例</p> <p>第12回 事例研究(4):組織の市場適応の事例</p> <p>第13回 応用研究(1):事例に関するディスカッション</p> <p>第14回 応用研究(2):事例の分析、応用研究(3):事例の発表</p>	

<p>テキスト・ 参考文献等</p>	<p>テキスト: 『組織デザイン』沼上幹(2004)日経文庫 『組織は戦略に従う』アルフレッド D. チャンドラー Jr. 有賀裕子訳(2004)ダイヤモンド社 『組織設計のマネジメント』ジェイ・R・ガルブレイス 梅津祐良訳(2002)生産性出版 『マエカワはなぜ跳ぶのか』前川正雄/野中郁次郎 (2011)ダイヤモンド社 その他、適宜参考資料等を配布する予定である。 参考文献: 『経営組織』金井壽宏(1999)日経文庫 『組織の経営学』リチャード・L・ダフト(高木晴夫訳)(2002)ダイヤモンド社 (他、授業時に紹介する)</p>
<p>その他 特記事項</p>	<p>(1)教材配布の方法について ・ 授業時に配布するか授業の5日前までに配布する。 (2)課題のテーマ提示について ・ 授業ごとの課題については、締め切り1週間前までにはテーマを提示する。 (3)テキストは事前に入手して購読しておくことが望ましい。 ・ 組織論を学習したことがない場合は、金井壽宏著『経営組織』(日経文庫)を読んで概要を理解しておくことが望ましい。 予習、復習、グループ学習等にかかわる準備学習については指示のとおり行うこと。</p>

科目名	経営戦略特別研究（アントレプレナーシップ論）
担当者	新藤 晴臣
目的	アントレプレナーシップは「起業家活動」と訳され、起業や創業を扱う研究領域である。当該領域の国際学会誌である“Journal of Business Venturing (JBV)”は1985年に創刊されるが、10年前にAクラスジャーナルに格上げされるなど、経営学の中でホットな研究領域であるといえる。その一方でアントレプレナーシップを理解する上で、いくつかの課題も存在する。第1に、多様なトピックが乱立し、それらが理論的に未整理である点が挙げられる。具体的には、「アントレプレナー」「起業プロセス」「起業機会の発見・創造」「コーポレート・アントレプレナーシップ」「大学発ベンチャー」など、多様な理論領域が含まれるだけでなく、それらの多くが整理されていないという課題がある。第2に、起業や創業を扱うことから、理論を複合的に理解することが求められる。具体的には、経営戦略論、組織論、ファイナンス論などの企業の「一断面」のみを理解するのではなく、それらを複合的に理解することが求められる。以上のアントレプレナーシップ論の特性を踏まえ、本講義では、アントレプレナーシップ論の整理を行いつつ、体系的に理解することを目的とする。
概要	本講義では、以下の到達目標を達成するために、2つの方法を用いるものとする。第1に、アントレプレナーシップ論の代表的な領域について、先行研究のレビューに関する講義を行う。第2に、アントレプレナーシップ論の代表的なレビュー論文の論点と背景について、議論を行う。以上2つの方法を用いて、アントレプレナーシップ論を整理しつつ、体系的に理解することを目指していく。
到達目標	本講義の到達目標としては、以下の2点が挙げられる。第1に、アントレプレナーシップの研究領域について、どのようなものがあるかを理解することを目標とする。第2に、アントレプレナーシップの研究領域の一部について、みずから整理ができるようになることを目標とする。以上の2点を通じて、アントレプレナーシップ論の先行研究レビューの基礎力が身につくことを目標とする。
成績評価の基準と方法	レポート 100%
履修条件	「経営戦略論基礎」を履修済み、あるいは免除されていることが望ましい。
授業内容	<p>第1回 イン트로ダクション</p> <p>第2回 アントレプレナーシップの基礎理論(1):経済学的アプローチ</p> <p>第3回 アントレプレナーシップの基礎理論(2):経営学的アプローチ</p> <p>第4回 アントレプレナーシップの基礎理論(3):アントレプレナー</p> <p>第5回 アントレプレナーシップの基礎理論(4):起業機会の創造と発見</p> <p>第6回 アントレプレナーシップの基礎理論(5):経営資源の獲得</p> <p>第7回 アントレプレナーシップの基礎理論(6):事業コンセプト</p> <p>第8回 アントレプレナーシップの基礎理論(7):ベンチャー企業の成長・発展</p> <p>第9回 アントレプレナーシップの応用理論(1):コーポレート・アントレプレナーシップ</p> <p>第10回 アントレプレナーシップの応用理論(2):コーポレート・ベンチャリング</p> <p>第11回 アントレプレナーシップの応用理論(3):戦略的アントレプレナーシップ</p> <p>第12回 アントレプレナーシップの応用理論(4):大学発ベンチャー</p> <p>第13回 アントレプレナーシップ論のレビュー(1):レビュー論文の抽出</p> <p>第14回 アントレプレナーシップ論のレビュー(2):関連論文の抽出 アントレプレナーシップ論のレビュー(3):先行研究の整理・議論</p>

<p>テキスト・ 参考文献等</p>	<p>テキスト: 『アントレプレナーの戦略論』 新藤晴臣(2010) 中央経済社 『コーポレート・アントレプレナーシップ』 新藤晴臣(2021) 日本評論社 『大学発ベンチャー』 スコット・シェーン(金井一頼・渡辺孝訳)(2005) 中央経済社 参考文献: 授業時に指示する。</p>
<p>その他 特記事項</p>	<p>(1) 教材配布の方法について ・ 授業時に配布する。 (2) 課題のテーマ提示について ・ 授業ごとの課題については、1週間前までにはテーマを提示する。 (3) テキストについて ・ テキストについては、事前に概要を理解しておくことが望ましい。</p>

科目名	経営戦略特別研究(アントレプレナーシップとビジネスプランニング)【後期】<MBA 合併科目>
科目ナンバリング	BS-MN5-2001
担当者	新藤 晴臣、宮永 雅好
履修条件	「経営戦略論」を履修済みあるいは履修中であること。原則として第3セメスターの履修となる。
科目の目的・到達目標	<p>(科目の目的)</p> <p>本講義では、創業・起業のプロセスや要素を論じる「アントレプレナーシップ」の基礎理論と、事業アイデアを具現化する手段である、ビジネスプランを作成することを目的とする。MBA の講義では、経営戦略、マーケティング、ファイナンスといった、多様な経営理論について専門的に学習するが、それらの理論を統合し、実践的に活用する機会は限られている。本講義では、事業アイデアをもとにビジネスプランを作成するプロセスを通じて、それらの理論を統合的かつ実践的に活用する方法を学ぶことを目的とする。</p> <p>(到達目標)</p> <p>本講義は、以下の3点を到達目標とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.アントレプレナーシップの基礎理論を理解する。 2.ビジネスプランを作成することで、多様な経営理論を、統合的に理解する。 3.ビジネスプラン作成と発表を通じて、事業アイデアの実現可能性について、客観的に説明する方法を身につける。 <p>この科目では7つの能力のうち以下の能力の涵養を目指す</p> <p>◎1:問題発見・解決力、◎2:戦略構想力、◎3:現状理解力、◎4:巻き込み力、◎5:資源動員力、◎6:ネットワーク力、◎7:コンプライアンス力</p>
概要	上記目標を達成するため、本講義では、授業計画の前半でアントレプレナーシップの基礎理論を説明した後、その概念に基づきビジネスプランを作成する。各回の講義では、最初に用いる理論・フレームについて簡単に説明した後、チームの議論を通じ、それら理論・フレームをもとにビジネスプランのパーツを作成する。それらパーツについては終盤で統合し、矛盾がないか確認をした上で、最終回で発表を行う。
授業計画	<p>第1回 アントレプレナーと経営チーム</p> <p>第2回 アントレプレナーシップの理論フレーム</p> <p>第3回 経営チーム/事業コンセプト構築/起業機会の説明</p> <p>第4回 産業分析</p> <p>第5回 産業分析・ミニ報告</p> <p>第6回 競合分析</p> <p>第7回 競合分析・ミニ報告</p> <p>第8回 マーケティング戦略</p> <p>第9回 マーケティング戦略・ミニ報告</p> <p>第10回 損益シミュレーション</p>

	<p>第11回 損益シミュレーション・ミニ報告 第12回 まとめ(1):整合性の確認 第13回 まとめ(2):プレゼンテーション準備 第14回 ビジネスプラン発表</p> <p>・アクティブ・ラーニング要素 ■ディスカッション、■グループワーク、■プレゼンテーション、□実習、□フィールドワーク、□その他()</p> <p>・(ICTを活用した)双方型授業の実施 □平日夜間オンライン授業:ZOOM ■土日対面授業実施 □クリッカー、□タブレット端末、□その他()</p>
成績評価の基準と方法	<p>成績評価の方法 ■グループワーク 50% ■プレゼンテーション 50% 合計 100%</p> <p>・成績評価の基準 ・グループワーク:グループワークとは、各チームでビジネスプランを作成する際の、各自のグループへの貢献度を意味する。これについては、教員及び受講者によるピアレビューにより評価を行う。 ・プレゼンテーション:作成されたビジネスプランについて、最終回でプレゼンテーションを行い、その完成度に対して、教員及び受講者によるピアレビューにより評価を行う。詳細な評価基準としては、事業コンセプトの可能性、経営理論の適切な使用、ビジネスプランの一貫性、表現力により構成される。</p> <p>・課題(中間試験やレポート等)に対するフィードバックの方法 ■授業時間内で講評・解説の時間を設ける</p> <p>・授業で使用する言語 ■日本語 □英語 □(その他)</p>
テキスト・参考文献等	<p>テキスト:『アントレプレナーの戦略論』新藤晴臣(中央経済社、2015年)</p> <p>参考文献は適宜紹介する。</p>
特記事項	<p>教材の配布の方法について ・テキスト以外の配布資料は、C plus で配布を行う。</p>

	<p>課題・宿題の課題テーマの提示について</p> <ul style="list-style-type: none">・各回のビジネスプラン作成の課題については、次回使用する理論・フレームとともに、講義の終わりに説明する。 <p>準備学習について</p> <ul style="list-style-type: none">・授業で提示する課題に必ず取り組むこと。・理論の詳細は講義で説明するが、テキストをある程度、事前に読んでおくことが望ましい。
--	--

科目名	経営戦略特別研究（経営戦略とイノベーション）
担当者	生稲 史彦
目的	DBAの博士論文を執筆するために、技術経営とイノベーション、企業戦略に関するこれまでの知見を理解する。
概要	受講者には、イノベーション研究の必読文献を読み、レジюмеを作成してもらい、講義ではレジюмеを元にして批判的検討を行い、論文の意義と発展可能性を論じる。
到達目標	技術経営、もしくはイノベーション研究の概念、思考法、学説史を理解する。 学術論文を書く際に、技術経営、イノベーション、経営戦略の文献レビューを書ける。
成績評価の基準と方法	毎回のレジюме提出、発言などの講義への貢献度
履修条件	特になし
授業内容	<p>第1回 イントロダクション—技術経営とイノベーションを巡る研究の概要</p> <p>第2回～第11回は、Burgelman, R. A., Christensen, C. M., and S. C. Wheelwright, S.C. (2003). <i>Strategic Management of Technology and Innovation</i>. McGraw Hill Higher Education. 邦訳, ロバート・バーゲルマン, クレイトン・クリステンセン, スティーブ・ウィールライト (2007) 『技術とイノベーションの戦略的マネジメント(上)(下)』 青島矢一(監訳). 翔永社. の章を選択的に読んでいく。(ただし、取り上げる文献などは変更の可能性はある)</p> <p>第2回 産業イノベーションのパターン</p> <p>第3回 競合する技術:概観</p> <p>第4回 アメリカの新薬開発に関する小論</p> <p>第5回 戦略的意図</p> <p>第6回 戦略形成と組織適応の組織内エコロジー</p> <p>第7回 ベクトルとしての戦略と共進化的ロックインの慣性</p> <p>第8回 吸収能力:学習とイノベーションに関する新しい視角</p> <p>第9回 リード・ユーザー調査に関する覚書</p> <p>第10回 2つの顔を持つ組織:漸進的な変化と革新的な変化のマネジメント</p> <p>第11回 エンジニアリング部門と製造部門間のコミュニケーション:決定的な要素</p> <p>第12回 「重量級」開発チームの編成と誘導</p> <p>第13回 製品統合性の力</p> <p>第14回 効率的な新製品開発のための、設計・試作・試験のサイクルを加速化する、講義のまとめ</p>
テキスト・参考文献等	<p>テキストは上記文献。参考書は以下の3冊</p> <p>榊原清則 (2005) 『イノベーションの収益化』有斐閣.</p> <p>榊原清則 (2002) 『経営学入門<第2版> (上)(下)』日経文庫.</p>
その他特記事項	特になし

科 目 名	経営戦略特別研究（ヘルスケアマネジメント）
担 当 者	真野 俊樹
目 的	ヘルスケアビジネスの特性を踏まえつつ博士論文を仕上げる能力を身に着ける
概 要	医療分野はコアの国民医療費の部分のみで40兆円超、周辺を入れればその2倍にもなるかという巨大な産業分野になっている。医療業界を解きほぐしながら、ビジネスとしての医療を学び、現業の改善や新たなチャンスを探る機会とする。特にこの講義では国内外の文献を検討することで、ヘルスケアマーケティング、ポリシー、マネジメントについて最新の動向を理解し、自らもレポートを書けるようにする。
到 達 目 標	ヘルスケアマーケティング、ポリシー、マネジメントについて最新の動向を理解し、自らもレポートを書けるようにする。
成績評価の 基準と方法	最終レポート（50%） 討議（30%） 出席（20%）
履 修 条 件	特になし
授 業 内 容	
第1回 各自のテーマの整理 第2回 今後の進め方について検討 課題について検討 第3回 ヘルスケアマネジメントについて課題として与えたヘルスケアマネジメント関連の文献を検討する（1） 第4回 ヘルスケアマネジメントについて課題として与えたヘルスケアマネジメント関連の文献を検討する（2） 第5回 ヘルスケアマーケティングについて課題として与えたヘルスケアマネジメント関連の文献を検討する（1） 第6回 ヘルスケアマーケティングについて課題として与えたヘルスケアマネジメント関連の文献を検討する（2） 第7回 日本のヘルスケアポリシーについて課題として与えたヘルスケアマネジメント関連の文献を検討する（1） 第8回 日本のヘルスケアポリシーについて課題として与えたヘルスケアマネジメント関連の文献を検討する（2） 第9回 海外のヘルスケアポリシーについて課題として与えたヘルスケアマネジメント関連の文献を検討	

<p>する (1)</p> <p>第10回 海外のヘルスケアポリシーについて課題として与えたヘルスケアマネジメント関連の文献を検討する (2)</p> <p>第11回 学生に与えた課題発表 (1)</p> <p>第12回 学生に与えた課題発表 (2)</p> <p>第13回 学生に与えた課題発表 (3)</p> <p>第14回 学生に与えた課題発表 (4)、まとめ</p>	
<p>テキスト・参考文献等</p>	<p>「入門医療経済学」(中公新書)、「入門医療政策」(中公新書)、「医療が日本の主力商品になる」(ディスカバー携書)、「比較医療政策」(ミネルバ書房)、「医療経済学で読み解く医療のモンダイ」(医学書院)、日本の医療、くらべてみたら10勝5敗3分けで世界一(講談社+α新書)「医療危機—高齢社会とイノベーション」(中公新書)、</p>
<p>その他 特記事項</p>	<p>特になし</p>

科目名	戦略経営特別研究フィールドラーニング（グローバル・イノベーション：米国シリコンバレー）
担当者	犬飼 知徳、高村 静、宇田川 博文
履修条件	「アントレプレナーシップとビジネスプランニング」を履修済みであること
科目の目的 ・到達目標	<p>（科目の目的）</p> <p>急速に変化する複雑なビジネス環境の中で、グローバル市場における競争力維持・向上は日本企業にとって大きな課題である。このような状況下においては、グローバルな視野と高度な専門知識を兼ね備えたイノベーション人材が不可欠である。本科目は、日々スタートアップ企業が誕生し、特に ICT 産業にとって最先端の情報・知識や人材が集積する場であるシリコンバレーを含む米国バイエリアに出向き、現地企業やスタートアップにてビジネスの現場を体験する。そうした体験を「アントレプレナーシップとビジネスプランニング」の履修を通じるなどして自ら立案した事業計画に照らし合わせることで、イノベーションの実現には何が必要なのかを実践の中から学び取ることを目的とする。</p> <p>（到達目標）</p> <p>最終的には起業・企業内起業（新規事業）・既存事業の変革を目指すほか、以下のような能力を獲得することを到達目標とする。</p> <p>①スタディツアー前後の机上学習や、現地滞在を通じて、専門知識の向上や異文化理解を深め、グローバルなビジネス環境での適応力や実践力を身につける。</p> <p>②作成した事業計画に対する個別指導や現地でのピッチを通じて、実践的なイノベーション能力を強化する。</p> <p>③スタートアップとのネットワーキングを通じた、実務的なキャリア開発の機会を得る。</p> <p>◎1：問題発見・解決力、◎2：戦略構想力、◎3：現状理解力、◎4：巻き込み力、◎5：資源動員力、◎6：ネットワーキング力、◎7：コンプライアンス力</p>
概要	参加者は事業計画を立てスタディツアーに参加することを必須とする。スタディツアー中ならびにスタディツアー前後に、現地のビジネスリーダーや専門家、あるいは戦略経営研究科の教員等に個別指導を受けながら、事業計画をブラッシュアップし、現地でプレゼンテーション（ピッチ）を行い、アドバイザーグループからフィードバックを受ける。最終的には起業・企業内起業（新規事業）・既存事業の変革を目指す。また、スタディツアーより帰国後、起業家や企業経営者等を招いた報告会を開催し、事業計画及びスタディツアーで学んだことを発表する機会を設ける。
授業計画	<p>現地渡航期間[予定] *2026年2月6日（金）～12日（木）</p> <p>第1回 事前学習（国内：オンラインまたはハイブリッド）</p> <p>*2026年2月4日（水）予定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義：米国バイエリアの起業事情等 ・演習：現地で実施するプレゼン準備

・団結式

第2回～13回（現地）

・現地日系機関のレクチャー、現地日系企業・現地企業訪問、現地大学関係者とのディスカッション、現地ベンチャーキャピタリストへのピッチとフィードバック、などを予定。

第14回 事後学習（国内）振り返り

第15回 事後学習（国内）成果報告（公開授業）*2月14日（土）予定

※M3 前に、オリエンテーション（科目ガイダンス）としてプレ講義を実施する。事前準備や、現地訪問先、費用などの詳細を説明する。

※M1 前の「アントレプレナーシップとビジネスプランニング」開講前にもプレ講義を実施する。その時点で決まっている内容を説明する。

※履修希望者には希望理由書の提出を求める。また、その内容をもとに履修者を決定する可能性がある。

※上記は現時点での予定であり、調整の結果、変更が生じる可能性がある。

<教員の実務経験の本授業への反映>

高村 静：(1999年11月～2009年3月 日興フィナンシャル・インテリジェンス株式会社勤務) 主任研究員兼アナリストとして行った企業訪問調査（企業の人材活用をテーマとする投資信託の銘柄選択に関する企業調査）の経験から得た様々な企業の多様な視座を講義に反映。

宇田川 博文：日本で経営に参画していたスタートアップ企業を米国企業に売却したことをきっかけに1997年にシリコンバレーに移住。以後25年間以上にわたって米国ソフトウェア企業でビジネスアプリケーション製品開発に従事。現在は個人としてシリコンバレーのHRテクノロジー系のスタートアップ企業のアドバイザー等を務めている。

・アクティブ・ラーニング要素

■ディスカッション、■グループワーク、■プレゼンテーション、■実習、■フィールドワーク、■PBL（課題解決型学習）、□反転授業（教育の中で行う授業学習と課題などの学習外学習を入れ替えた学習形式）、□ディベート、□その他（）、□実施していない

・（ICTを活用した）双方型授業の実施

□平日夜間オンライン授業：ZOOM

■対面授業実施

□クリッカー、□タブレット端末、□その他（）

<p>成績評価の 基準と方法</p>	<p>・成績評価の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ■課題レポート（ピッチコンテストでの他者へのフィードバックレポート 20% ■授業内での挙手発言 20% ■プレゼンテーション（現地で実施するピッチを含む） 50% ■その他（「7つの力」のルーブリックによる到達度評価） 10% <p>合計 100%</p> <p>・成績評価の基準</p> <p>プレゼンテーション：自ら作成した事業計画の内容をブラッシュアップするとともに、プレゼンテーションの準備を行い、現地において、ベンチャーキャピタリストらによって組成されるアドバイザリーチームに対してピッチを行う。アドバイザリーチームからの評価（フィードバックあり）および教員の評価によって採点する。具体的な評価基準は、事業コンセプト、ビジネスプランの一貫性と実全可能性、表現力等により構成される。</p> <p>成果報告会での報告：帰国後に行われる成果報告会において、事前準備、現地ツアー、ピッチコンテストなどから得られた成果の報告を行う。その内容を教員が評価する。</p> <p>・課題（中間試験やレポート等）に対するフィードバックの方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ■授業時間内で講評・解説の時間を設ける <input type="checkbox"/>授業時間に限らず、Cplus 等でフィードバックを行う <input type="checkbox"/>その他（ ）
<p>テキスト・ 参考文献等</p>	<p>必要に応じて適宜紹介する。</p>
<p>特記事項</p>	<p>教材の配布の方法について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テキスト以外の配布資料は、Cplus で配布を行う。 <p>準備学習について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・別途プレ講義（オリエンテーション/科目ガイダンス）などで説明する。 ・今後テキストが紹介される場合には、事前に読んでおくことが望ましい。

科目名	戦略経営特別研究フィールドラーニング（グローバル・イノベーション：ベトナム）
担当者	中村 博、金 雲鎬
履修条件	グローバルビジネスに関する科目（グローバル戦略論、グローバル法務、アジアビジネス論、Strategic Management & Global Leadership など）を履修済であることが望ましい
科目の目的 ・到達目標	<p>（科目の目的）</p> <p>急速に変化する複雑なビジネス環境の中で、グローバル市場における競争力維持・向上は日本企業にとって大きな課題である。このような状況下においては、グローバルな視野と高度な専門知識を兼ね備えたイノベーション人材が不可欠である。本科目では、アジアの中でも成長が著しく、日系企業も多く進出しているベトナムに出向き、スタートアップなどの現地企業や、現地に進出している日系企業、大学などでイノベーションの現場を体験する。そうした体験をもとに、「ベトナムでのビジネス展開」に何が必要なのかを構想することを通じて、実践の中から学び取ることを目的とする。</p> <p>（到達目標）</p> <p>最終的にはベトナムを含むアジアでの事業展開を目指すほか、以下のような能力を獲得することを到達目標とする。</p> <p>①スタディツアー前後の机上学習や、現地滞在中を通じて、専門知識の向上や異文化理解を深め、グローバルなビジネス環境での適応力や実践力を身につける。</p> <p>②ベトナムでのビジネス展開にむけた提案書の作成を通じ、実践的なイノベーション能力を強化する。</p> <p>③現地企業とのネットワーキングを通じた、実務的なキャリア開発の機会を得る。</p> <p>この科目では7つの能力のうち以下の能力の涵養を目指す：◎1：問題発見・解決力、◎2：戦略構想力、◎3：現状理解力、○4：巻き込み力、○5：資源動員力、◎6：ネットワーキング力、○7：コンプライアンス力</p>
概要	参加者はベトナムの経済・文化などについて事前に調べた上で、スタディツアーに参加することを必須とする。現地で学んだことを発表する機会として、スタディツアー後の報告会でプレゼンテーションを行う。
授業計画	<p>現地渡航期間[予定]2026年2月3日（火）～8（日）</p> <p>第1回 事前学習（国内）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義：①ベトナムの状況 ②現地での活動について ・団結式： <p>第2回～第13回（現地）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・在ベトナム日系機関でのレクチャー、現地企業・現地日系企業訪問、日越大学でのディスカッション

	<p>ン</p> <p>第14回 事後学習（国内）振り返り</p> <p>第15回 事後学習（国内）成果報告（公開授業）</p> <p>※事前・事後学習の時期、現地訪問先、費用など詳細は、M3前のプレ講義にて説明する。</p> <p>※履修希望者多数の場合は抽選により履修者を決定する可能性がある。</p> <p>※上記は現時点の予定であり、調整の結果、変更が生じる可能性がある。</p> <p><教員の実務経験の本授業への反映></p> <p>中村博</p> <p>1981年～1996年まで公益財団法人流通経済研究所において、マーケティングのコンサルティング業務に携わり、メーカーや小売業の新製品マーケティングのサポートを行った。これらの経験を活かして、商品開発・市場導入の授業を行う。メーカーおよび小売業とアジアショッパーインサイト研究会([参考URL])を主宰している。</p> <p>・アクティブ・ラーニング要素</p> <p>■ディスカッション、■グループワーク、■プレゼンテーション、■実習、■フィールドワーク、■PBL（課題解決型学習）、□反転授業（教育の中で行う授業学習と課題などの学習外学習を入れ替えた学習形式、□ディベート、□その他（）、□実施していない</p> <p>・（ICTを活用した）双方型授業の実施</p> <p>□平日夜間オンライン授業：ZOOM</p> <p>■対面授業実施</p> <p>□クリッカー、□タブレット端末、□その他（）</p>
成績評価の基準と方法	<p>・成績評価の方法</p> <p>■参加者による相互評価 10%</p> <p>■プレゼンテーション（成果報告会での報告） 40%</p> <p>■その他（「7つの力」のルーブリックによる到達度評価） 50%</p> <p>合計 100%</p> <p>・成績評価の基準</p> <p>グループワーク：現地に関する事前調査や成果報告会での報告に向けた準備など、グループへのコミットメントの度合いにもとづき評価する。</p> <p>成果報告会での報告：帰国後に行われる成果報告会において、事前準備、現地ツアーなどから得られた、成果の報告を行う。その内容を教員が評価する。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・課題（中間試験やレポート等）に対するフィードバックの方法 ■授業時間内で講評・解説の時間を設ける □授業時間に限らず、Cplus等でフィードバックを行う □その他（ ）
テキスト・参考文献等	必要に応じて適宜紹介する。
特記事項	<p>教材の配布の方法について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テキスト以外の配布資料は、C plus で配布を行う。 <p>課題・宿題の課題テーマの提示について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <p>準備学習について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業で提示する課題に必ず取り組むこと。 ・テキストをある程度、事前に読んでおくことが望ましい。

科目名	マーケティング特別研究（流通論）
担当者	中村 博
目的	流通論の理論と研究方法論を学び、院生各自の研究テーマを深めることを目的とする。
概要	小売業および卸売業のMDおよびマーケティング戦略論およびメーカーのチャネル戦略研究の理論および研究の方法論について講義・発表・検討を行う。
到達目標	小売戦略、卸売戦略およびこれら流通業の戦略に対応したメーカーの流通およびマーケティング戦略研究に必要な理論と方法論の知識と活用の仕方を身につけ自立した研究活動ができるようになることを目指す。
成績評価の基準と方法	出席、課題レポートおよび講義への貢献(発言など)
履修条件	マーケティング戦略論を履修済みであることを原則とする
<p>授業内容</p> <p>第1回 イン트로ダクション</p> <p>第2回 流通機構Ⅰ</p> <p>第3回 流通機構Ⅱ</p> <p>第4回 流通業のマーケティング戦略Ⅰ</p> <p>第5回 流通業のマーケティング戦略Ⅱ</p> <p>第6回 流通業のマーケティング戦略Ⅲ</p> <p>第7回 流通業のマーケティング戦略Ⅳ</p> <p>第8回 メーカーのチャネル戦略Ⅰ</p> <p>第9回 メーカーのチャネル戦略Ⅱ</p> <p>第10回 メーカーのチャネル戦略Ⅲ</p> <p>第11回 研究発表Ⅰ</p> <p>第12回 研究発表Ⅱ</p> <p>第13回 研究発表Ⅲ</p> <p>第14回 研究発表Ⅳ、まとめ</p>	
テキスト・参考文献等	Riley, F.D. (ed.) (2010). <i>Brand management</i> . (4 Vols.). Los Angeles: Sage.(予定)
その他特記事項	なし。

科目名	マーケティング特別研究（マーケティング・サイエンス）
担当者	阿部 誠
目的	客観的なデータに基づいたマーケティング・サイエンスのアプローチを学び、院生各自の研究テーマを深めることを目的とする。
概要	マーケティング・サイエンスのアプローチ、研究と応用について講義・発表・検討を行う。
到達目標	マーケティング・サイエンス研究に必要な理論と方法論の知識と活用の仕方を身につけ自立した研究活動ができるようになることを目指す。
成績評価の基準と方法	出席、課題レポートおよび講義への貢献(発言など)
履修条件	マーケティング戦略論を履修済みであることを原則とする
<p>授業内容</p> <p>第1回 インTRODクシヨN(マーケティング・サイエンスを研究テーマとすることの意義、研究動向)</p> <p>第2回 マーケティング・サイエンスの考え方</p> <p>第3回 マーケティング・サイエンスの意義と限界</p> <p>第4回 複眼的観点で見るマーケティング・サイエンス</p> <p>第5回 グローバルな観点で見るマーケティング・サイエンス</p> <p>第6回 優れたマーケティング・サイエンスの研究とは何か</p> <p>第7回 マーケティング・サイエンス研究における研究テーマとリサーチクエスチヨNの見つけ方</p> <p>第8回 マーケティング・サイエンス研究における理論仮説の作り方</p> <p>第9回 マーケティング・サイエンス研究におけるさまざまな方法論</p> <p>第10回 グローバル企業におけるマーケティング・サイエンス研究</p> <p>第11回 研究発表Ⅰ</p> <p>第12回 研究発表Ⅱ</p> <p>第13回 研究発表Ⅲ</p> <p>第14回 研究発表Ⅳ、まとめ</p>	
テキスト・参考文献等	<p>文献リストを事前に配布する。参考文献として以下の書籍を読んでおくことをすすめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 『新版 マーケティング・サイエンス入門:市場対応の科学的マネジメント』 古川一郎・守口剛・阿部誠(著)、有斐閣
その他特記事項	なし。

科目名	マーケティング特別研究（マーケティング戦略）
担当者	金雲鎬
目的	さまざまなマーケティング理論を相互に関連付けながら学び、院生各自の研究テーマを深めることを目的とする。
概要	マーケティング戦略、マーケティングと組織、マーケティング能力、企業間関係、グローバルマーケティング、デジタル技術を活用したマーケティング問題の解決など、さまざまなマーケティング分野の理論について講義・発表・検討を行う。
到達目標	マーケティング戦略研究に必要な理論と方法論の知識と活用の仕方を身につけ自立した研究活動ができるようになることを目指す。
成績評価の基準と方法	出席、課題レポートおよび講義への貢献(発言など)
履修条件	マーケティング戦略論を履修済みであることを原則とする
<p>授業内容</p> <p>第1回 イン트로ダクション(マーケティング戦略を研究テーマとすることの意義、研究動向)</p> <p>第2回 マーケティングの考え方</p> <p>第3回 マーケティングマネジメント論の意義と限界、マーケティング戦略論</p> <p>第4回 複眼的観点で見るマーケティング戦略①</p> <p>第5回 複眼的観点で見るマーケティング戦略②</p> <p>第6回 優れたマーケティング戦略研究とは何か</p> <p>第7回 マーケティング戦略分野における研究テーマの見つけ方</p> <p>第8回 マーケティング戦略研究におけるリサーチクエスションの作り方</p> <p>第9回 マーケティング戦略研究における理論仮説の作り方</p> <p>第10回 マーケティング戦略研究におけるさまざまな方法論</p> <p>第11回 研究発表Ⅰ</p> <p>第12回 研究発表Ⅱ</p> <p>第13回 研究発表Ⅲ</p> <p>第14回 研究発表Ⅳ、まとめ</p>	
テキスト・参考文献等	文献リストを事前に配布する。参考文献として以下の書籍を読んでおくことをすすめる。 ・高嶋克義『現代マーケティング論(有斐閣アルマ)』有斐閣、2008年。
その他特記事項	授業内容は、履修者が希望する研究テーマに応じて柔軟に変更することがある。

科目名	人的資源管理特別研究（人的資源管理論）
担当者	島貫 智行
目的	人的資源管理論（Human Resource Management : HRM）の実証論文の輪読を通じて、当該分野の研究蓄積と近年の潮流に関する基礎知識を習得する。
概要	戦略人事、採用、育成、評価、報酬、ワーク・ライフ・バランス、ダイバーシティ、グローバル人事などのトピックに関して、近年の論文を中心に輪読する。
到達目標	人的資源管理論における研究の蓄積と近年の傾向を把握するとともに、実証論文の問題設定や先行研究の検討、仮説の導出、調査・分析方法、分析結果の考察などに関する理解を深め、人的資源管理分野で博士論文を執筆するための基礎力を習得する。
成績評価の基準と方法	予習課題の提出、授業時の報告、授業時の発言内容や頻度により評価する。
履修条件	特になし
授業計画	リーディングリストから課題論文を指定し、報告者を割り当てる。報告者以外は課題論文の論点についてのレジュメを提出する。 第1回 Strategic Human Resource Management 第2回 Internal Labor Markets 第3回 Recruitment and Selection 第4回 Training and Development 第5回 Performance Appraisal 第6回 Compensation 第7回 Work-Life Balance 第8回 Human Resource Architecture and HR Flexibility 第9回 International HRM 第10回 Diversity and HRM 第11回 Innovation and HRM 第12回 Organizational Change and HRM 第13回 Employment Relations and HRM 第14回 Corporate Social Responsibility and HRM
テキスト・参考文献等	リーディングリストと論文を配付する。リスト以外の文献は適宜紹介する。
その他特記事項	<ul style="list-style-type: none"> 指定された論文を予習したうえで授業に参加すること。 人的資源管理論の基礎知識が必要となる。以下の書籍を事前に学習しておくこと。 佐藤博樹・藤村博之・八代充史『新しい人事労務管理（第6版）』有斐閣 今野浩一郎・佐藤博樹『人事管理入門（新装版）』日本経済新聞出版

科目名	人的資源管理特別研究（職場マネジメントとキャリア形成）
担当者	高村 静
目的	「職場のマネジメントとキャリア形成」のテーマに即してマイクロ組織論および人事労務管理を中心とする文献（主に論文）を輪読する。当該分野の基礎知識を習得するとともに、先行研究による研究蓄積を把握する。
概要	人間モデルに立脚したモチベーション、コミットメント、リーダーシップなどマイクロ組織論が提示する理論に対する理解を深めるとともに、近年の職場マネジメントの重要なトピックであるキャリア形成に関する論点を扱う文献を輪読する。
到達目標	博士論文執筆のための基礎力を得ることを目標に、上記トピックを中心とする研究の蓄積や近年の傾向の把握を行うとともに、論文執筆に必要な問題設定や先行研究の検討、仮説の導出、調査・分析方法、分析結果の考察などに関する理解を深める。
成績評価の基準と方法	授業時の報告、授業時の発言内容や頻度により評価する。
履修条件	特になし
授業計画	<p>各回の授業で議論の対象とする文献リストを事前に提示する。授業では、その回の報告者が指定された文献（主に論文）について内容および論点を提示し、それをもとに全員で議論を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 職場マネジメントの基礎概念 2. モチベーション 3. コミットメント 4. リーダーシップ 5. コミュニケーション 6. 公正 7. OJT とキャリア形成 8. 経験学習とキャリア形成 9. キャリア自律とキャリア形成 10. エンプロアビリティとキャリア形成 11. 人材の多様化とキャリア形成 12. ワーク・ライフ・バランスとキャリア形成 13. 女性のキャリア形成 14. 雇用形態の多様化とキャリア形成
テキスト・参考文献等	<p>テキストは指定しない。文献リストと論文を事前に配布する。</p> <p>参考文献として以下の書籍を読んでおくことをすすめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 二村敏子（編）『現代マイクロ組織（有斐閣ブックする 432）』有斐閣, 2004年 ・ 金井 寿宏（著）, 高橋 潔（著）『組織行動の考え方—ひとを活かし組織力を高める 9つのキーコンセプト（一橋ビジネスレビューブックス）』東洋経済新報社 2004年 ・ 武石恵美子『キャリア開発論—自律性と多様性に向き合う』中央経済グループパブリッシング 2023年
その他特記事項	・ 指定された文献を事前に読んだうえで授業に参加すること。

科目名	ファイナンス特別研究 (コーポレート・ファイナンスと企業戦略)
担当者	大野 薫
目的	コーポレート・ファイナンスに関する理論と実証研究の理解を深め、ファイナンス的な観点から企業戦略に対する知見を得ることを目的とする。
概要	現在価値、効率的市場仮説、資本資産価格モデル、企業の最適資本構成(MM理論)、オプション理論、短期財務計画の策定等、コーポレート・ファイナンス分析の様々な側面について、ケース分析やディスカッションを通して考察する。
到達目標	MPT及びCAPM、MM理論、オプション理論といったファイナンス評価の土台となる理論とその限界を理解し、コーポレート・ファイナンスの問題に対して、自ら問題を定義し、理論の応用と実証研究に基づいた分析が行えるようになることを目的とする。
成績評価の基準と方法	理論および実証研究を基にしたケース分析レポート、講義への貢献度(出席、発言、討議への参加、プレゼンテーション等々)、および最終課題。
履修条件	コーポレート・ファイナンスに関する基礎知識を有していること。
授業内容	<p>第1回 講義の概要と紹介</p> <p>第2回 純現在価値(NPV)分析の基礎</p> <p>第3回 リスクとリターン、現代ポートフォリオ理論(MPT)</p> <p>第4回 資本資産価格モデル(CAPM)とキャピタル・バジェットティング</p> <p>第5回 効率的市場仮説と行動ファイナンス</p> <p>第6回 資本構成の理論(MM理論)</p> <p>第7回 負債使用の限界と現実的な要因</p> <p>第8回 配当の意思決定</p> <p>第9回 割引キャッシュフロー(DCF)法の限界とリアル・オプション評価</p> <p>第10回 オプションとコーポレート・ファイナンス</p> <p>第11回 デリバティブとリスクヘッジ</p> <p>第12回 短期財務</p> <p>第13回 合併、買収、財務的困難</p> <p>第14回 最終課題の発表、および講評</p>
テキスト・参考文献等	<ul style="list-style-type: none"> ・Ross S. A., Westerfield, R. W., Jaffe, J. & Jordan, B. D. (2021) "Corporate Finance 13th ed." McGraw-Hill Education. ・Ross S. A., Westerfield, R. W., & Jaffe, J.著 『コーポレートファイナンスの原理(第9版)』大野薫訳(金融財政事情研究会、2012年)。 ・大野薫著 『モンテカルロ法によるリアル・オプション分析—事業計画の戦略的評価—』金融財政事情研究会、2013年。
その他特記事項	

科目名	ファイナンス特別研究（インベストメント）
担当者	大野 薫
目的	インベストメントに関する理論と実証研究の理解を深め、ファイナンス的な投資意思決定分析の観点から企業戦略に対する知見を得ることを目的とする。
概要	リスク・プレミアムと均衡理論から始め、期待収益、割引率、リスクの市場価値、分散化、最適化、ポートフォリオ選択、リスク管理などの概念に続いて、不確実性を伴う戦略的な事業の合理的評価を考察する。
到達目標	効率的市場と分散化の意味を再確認し、投資意思決定の基礎となるリスクの均衡価値を理解する。さらに均衡理論の限界を踏まえながら、企業が持つ投資戦略的オプションの合理的分析が行えるようになることを目的とする。
成績評価の基準と方法	宿題、講義への貢献度(出席、発言、討議への参加、プレゼンテーション等々)、および最終課題。
履修条件	ファイナンス特別研究（コーポレート・ファイナンスと企業戦略）を履修済みまたは同等の知識があること。
授業内容	<p>第1回 講義の概要と紹介</p> <p>第2回 リスク、機会集合、市場均衡</p> <p>第3回 平均分散ポートフォリオ・モデル</p> <p>第4回 重要な関係と定理、βの理解(分散の分解)</p> <p>第5回 キャピタル・アセット・プライシング・モデル(CAPM)</p> <p>第6回 機会集合からのポートフォリオ選択方法</p> <p>第7回 バリュアット・リスク(VaR)とコンディショナル・バリュアット・リスク(C-VaR)</p> <p>第8回 ノンスタンダード CAPM と均衡理論の限界</p> <p>第9回 アービトラージ・プライシング・モデル(APT)</p> <p>第10回 金利理論と債券のプライシング、債券ポートフォリオ管理</p> <p>第11回 ヘッジファンドとポートフォリオ・パフォーマンスの評価</p> <p>第12回 オプションと企業戦略</p> <p>第13回 事業計画の戦略的評価</p> <p>第14回 最終課題の発表、および講評</p>
テキスト・参考文献等	<ul style="list-style-type: none"> ・Elton, E. J., Gruber, M. J., Brown, S. J. & Goetzmann, W. N. Modern Portfolio Theory and Investment Analysis. 9th Edition, Wiley, 2014. ・サイモン・ベニンガ著『ファイナンシャル・モデリング』大野薫監訳(ロギカ書房、2017年)。 ・大野薫著『モンテカルロ法によるリアル・オプション分析—事業計画の戦略的評価—』金融財政事情研究会、2013年。
その他特記事項	

科目名	経営法務特別研究（金融取引法務）
担当者	杉浦 宣彦
目的	会社法務や金融法務等の実務の中で応用可能な金融取引に係るアドバンスな法知識の取得を目的とする。
概要	<p>金融機関に関する法律は、従来、専門的かつ技術的であり、さらには金融機関と関連する法律が具体的にどのような保護や利益を国民に与えているかについても必ずしも明確ではなかったためにあまり多くの国民の関心を得てこなかった分野であった。</p> <p>しかし、金融ビッグバンによる規制緩和で金融サービスは拡大し、歴史的な低金利時代を通じて、国民は預金以外の様々な金融商品への投資が行うようになり、また、その一方、金融商品は金融工学等の発展に伴い、従前の預金・貸付・為替等の金融取引ではなく、資産流動化やシンジケーションローン等、比較的高度な金融商品が次々と登場し、さらには、電子マネーの普及など、金融法務の幅は飛躍的に拡大してきた。このような現実を背景にして、最近の金融商品取引法の制定ならびにその改正作業等の動きで象徴されるように、金融法の内容・範囲も大幅に変化を見せている。</p> <p>さらに、サブプライムローン問題を皮切りに発生した世界的な金融危機の流れの中で、それまで緩和路線であった金融法制は大きな方向転換期にさしかかっているように見える。</p> <p>本講義では、まず、前半で各金融業（銀行、証券、保険、信託、貸金業等）で構成される金融システムを理解するために、わが国の金融制度全体とそれらに関連する法について論じ、その後、各種取引ごとに法的論点を判例等を用いながら明らかにしていく。また、どのように金融機関が規制・保護されているのか、業際規制やセーフティネット、さらには金融不正取引における等についても触れることにする。次に、具体的な金融取引のうち、様々な金融行が関与している流動化やシンジケーションローン、さらには、プロジェクト・ファイナンスの法的課題について解説する。最後には、最新の動きである、電子金融取引をめぐる法的課題についても検討を行う方針である。</p>
到達目標	金融法制の全体像や最新の状況をつかむと共に、民商法との親和性に気づき、それらの基本法理の理解を確認するとともに応用力の向上を目指す。
成績評価の基準と方法	レポート(70%等)ならびに講義への参加度(30%程度)等を総合的に評価する。
履修条件	特に設けないが、金融関連ビジネスでの経験や企業の法務・コンプライアンス・内部統制に従事した経験があることが望ましい。

授 業 内 容	
第 1回	金融制度と法 (総論)
第 2回	金融機関と法 (それぞれの金融機関とそれにかかわる法)
第 3回	金融取引と法 (各論(2)証券取引)
第 4回	金融取引と法 (各論(3)保険取引)
第 5回	金融取引と法 (各論(4)貸金号・信託業など)
第 6回	金融機関の業務の健全性
第 7回	業際規制とセーフティネット
第 8回	不正金融取引への対応 (1)
第 9回	不正金融取引への対応 (2)
第10回	流動化(証券化)をめぐる法的仕組み (1) ー譲渡法制およびビークル(資産譲受主体:信託法を含む)法制の概要
第11回	流動化(証券化)をめぐる法的仕組み (2) ー証券化における証券法制およびサービサー法制の概要
第12回	流動化(証券化)をめぐる法的仕組み (3) ー資産流動化と倒産法制 (倒産隔離、真正売買その他の論点)
第13回	シンジケートローン
第14回	プロジェクト・ファイナンス 電子金融取引と法 (資金決済法・電子記録債権法等)
テキスト・ 参考文献等	動きの早い分野なので、特に現段階では、テキストは指定しないが、以下を参考文献として紹介しておく。 松尾 直彦『金融商品取引法〔第3版〕』有斐閣(2014年) 小山 嘉昭『詳解 銀行法【全訂版】』きんざい(2012年) 吉井一洋編著『バーゼル規制とその実務』きんざい(2014年) 山下友信『論点体系 保険法1・2』第一法規(2014年) 金融法規研究会 編『金融六法』(各年度版) 学陽書房
その他 特記事項	特になし。

科 目 名	研究指導 I
担 当 者	阿部 誠、生稲 史彦、石島 博、犬飼 知徳、金 雲鎬、島貫 智行、 新藤 晴臣、杉浦 宣彦、高村 静、竹田 陽子、露木 恵美子、遠山 亮子、 中村 博、真野 俊樹、杉浦 宣彦
履 修 条 件	特になし
科 目 の 目 的 ・ 到 達 目 標	<p>目的：研究指導 I は、博士論文執筆を計画的かつ着実に進め、博士課程の各段階において求められる研究水準に達することを目指す。毎回の研究報告や文献輪読等に対して、指導教員から助言および批判を受けつつ、高度な専門知識を習得していくことを目的とする。</p> <p>目標：研究指導 I は、博士課程の各段階の評価に当たって合格に値する学識・技術の高度な専門性を習得することである。特に、研究指導 I ではサーベイ報告書をまとめることを目標とする。</p> <p>この科目（DBA）では4つの能力のうち以下の能力の涵養を目指す：◎1：戦略経営に関する学術的知見、◎2：研究方法論に関する深い理解、◎3：実務上の課題を設定し解決する能力、◎4：体系化された研究を実行できる知識・能力、</p>
概 要	研究指導 I では、1 年次において博士号学位に相応しい水準の「サーベイ報告書」の執筆を目指す。さらに、指導教員と相談しつつ、博士論文を構成する研究内容を学会で研究発表したり、査読付き学術誌に論文を投稿したりすることに向けての計画・準備を進める。
授 業 計 画	<p><前期></p> <p>第 1 回 研究テーマと計画の報告（研究テーマや研究計画、現状の研究の進捗およびその成果を報告）</p> <p>第 2 回 主要先行論文サーベイの報告①（研究テーマに基づく、主要先行論文サーベイの報告）</p> <p>第 3 回 主要先行論文サーベイの報告②（研究テーマに基づく、主要先行論文サーベイの報告）</p> <p>第 4 回 主要先行論文サーベイの報告③（研究テーマに基づく、主要先行論文サーベイの報告）</p> <p>第 5 回 研究方法の報告①（研究テーマ・論文サーベイに基づく、研究方法の報告）</p> <p>第 6 回 研究方法の報告②（研究テーマ・論文サーベイに基づく、研究方法の報告）</p> <p>第 7 回 研究方法の報告③（研究テーマ・論文サーベイに基づく、研究方法の報告）</p> <p>第 8 回 博士論文の構成の報告①（研究テーマ・論文サーベイ・研究方法に基</p>

<p>づく、博士論文構成の報告)</p> <p>第 9 回 博士論文の構成の報告② (研究テーマ・論文サーベイ・研究方法に基づく、博士論文構成の報告)</p> <p>第 10 回 論文執筆指導① (研究テーマ、論文サーベイ、研究方法、論文構成等に基づき、(博士論文を構成する 1 章に相当する) 論文執筆の指導をうける)</p> <p>第 11 回 論文執筆指導② (研究テーマ、論文サーベイ、研究方法、論文構成等に基づき、(博士論文を構成する 1 章に相当する) 論文執筆の指導を受ける)</p> <p>第 12 回 博士課程中間報告の準備① (提出論文および、発表スライドの報告)</p> <p>第 13 回 博士課程中間報告の準備② (提出論文および、発表スライドの報告)</p> <p>第 14 回 博士課程中間報告のフィードバック (博士課程中間報告会での指摘事項の整理)</p> <p><後期></p> <p>第 15 回 研究テーマと計画の報告 (研究テーマや計画、現状の研究の進捗度およびその成果を報告)</p> <p>第 16 回 主要先行論文サーベイの報告① (研究テーマに基づく、主要先行論文サーベイの報告)</p> <p>第 17 回 主要先行論文サーベイの報告② (研究テーマに基づく、主要先行論文サーベイの報告)</p> <p>第 18 回 主要先行論文サーベイの報告③ (研究テーマに基づく、主要先行論文サーベイの報告)</p> <p>第 19 回 研究方法の報告① (研究テーマ・論文サーベイに基づく、研究方法の報告)</p> <p>第 20 回 研究方法の報告② (研究テーマ・論文サーベイに基づく、研究方法の報告)</p> <p>第 21 回 研究方法の報告③ (研究テーマ・論文サーベイに基づく、研究方法の報告)</p> <p>第 22 回 博士論文の構成の報告① (研究テーマ・論文サーベイ・研究方法に基づく、博士論文構成の報告)</p> <p>第 23 回 博士論文の構成の報告② (研究テーマ・論文サーベイ・研究方法に基づく、博士論文構成の報告)</p> <p>第 24 回 論文執筆指導① (研究テーマ、論文サーベイ、研究方法、論文構成等に基づき、(博士論文を構成する 1 章に相当する) 論文執筆の指導やサーベイ報告書を受ける)</p> <p>第 25 回 論文執筆指導② (研究テーマ、論文サーベイ、研究方法、論文構成等に基づき、(博士論文を構成する 1 章に相当する) 論文執筆の指導やサーベイ報告書を受ける)</p> <p>第 26 回 博士課程サーベイ報告書中間報告会の準備① (提出論文および、発表スライドの報告)</p> <p>第 27 回 博士課程サーベイ報告書の準備② (提出論文および、発表スライド</p>
--

	<p>の報告)</p> <p>第 28 回 博士課程サーベイ報告書のフィードバック (博士課程中間報告会での指摘事項の整理)</p> <p>※ 実際の研究調査の進め方は担当教員によって変わる可能性があります</p> <p>教員によっては MBA 課程の学生等との合同指導やディスカッションなどが行われることもある。実施形式等は受講生と指導教員で相談して決定する。</p> <p>・アクティブ・ラーニング要素</p> <p>■ディスカッション、□グループワーク、■プレゼンテーション、■実習、□フィールドワーク、□PBL (課題解決型学習)、□反転授業 (教育の中で行う授業学習と課題などの学習外学習を入れ替えた学習形式、□ディベート、□その他 ()、□実施していない</p> <p>・(ICT を活用した) 双方型授業の実施</p> <p>■平日夜間オンライン授業 : ZOOM</p> <p>■土日対面授業実施</p> <p>□クリッカー、□タブレット端末、□その他 ()</p>
成績評価の基準と方法	<p>成績評価は、学会発表、査読付き雑誌への論文投稿などの研究成果や進捗状況、セミナーへの出席や論文発表などの研究活動、研究の進捗状況や態度によって決定されます。</p> <p>※出席は前提であり、出席だけでは評価点となりません。</p> <p>・課題 (中間試験やレポート等) に対するフィードバックの方法</p> <p>■授業時間内で講評・解説の時間を設ける</p> <p>・授業で使用する言語</p> <p>■日本語 ■英語 □ (その他)</p>
テキスト・参考文献等	<p>特に指定しません。必要に応じて指導教員が紹介します。</p>
特記事項	<p>指導教員の方針や受講生の要望あるいは進行状況によって、適宜、授業計画が修正されることがあります。</p>

科 目 名	研究指導 II
担 当 者	阿部 誠、生稲 史彦、石島 博、犬飼 知徳、金 雲鎬、島貫 智行、新藤 晴臣、杉浦 宣彦、高村 静、竹田 陽子、露木 恵美子、遠山 亮子、中村 博、真野 俊樹、杉浦 宣彦
履 修 条 件	研究指導 I を履修済みであること
科 目 の 目 的 ・ 到 達 目 標	<p>目的：研究指導 II は、博士論文執筆を計画的かつ着実に進め、博士課程の各段階において求められる研究水準に達することを目指す。毎回の研究報告や文献輪読等に対して、指導教員から助言および批判を受けつつ、高度な専門知識を習得していくことを目的とする。</p> <p>目標：博士課程の各段階の評価に当たって合格に値する学識・技術の高度な専門性を習得すること。特に、研究指導 II では、「研究年報」への投稿を目指す。</p> <p>この科目（DBA）では4つの能力のうち以下の能力の涵養を目指す：◎1：戦略経営に関する学術的知見、◎2：研究方法論に関する深い理解、◎3：実務上の課題を設定し解決する能力、◎4：体系化された研究を実行できる知識・能力、</p>
概 要	研究指導 II では、2年次において博士号学位に相応しい水準の論文を執筆し、「研究年報」への投稿を目指す。さらに、指導教員と相談しつつ、博士論文を構成する研究内容を学会で研究発表したり、査読付き学術誌に論文を投稿したりすることに向けての計画・準備を進める。
授 業 計 画	<p><前期></p> <p>第1回 「研究計画書」の再検討の結果報告（「研究計画書」の再検討の結果報告、およびそれに基づく、現状の研究成果を報告）</p> <p>第2回 先行論文サーベイと研究報告①（「研究計画書」に基づく、先行論文サーベイと、研究の位置付けの報告）</p> <p>第3回 先行論文サーベイと研究報告②（「研究計画書」に基づく、先行論文サーベイと、研究の位置付けの報告）</p> <p>第4回 先行論文サーベイと研究報告③（「研究計画書」に基づく、先行論文サーベイと、研究の位置付けの報告）</p> <p>第5回 博士論文を構成する章の報告①（「研究計画書」に基づく、博士論文を構成する章（少なくとも1章）の報告）、査読付論文（研究年報含む）への投稿に向けた報告・指導</p> <p>第6回 博士論文を構成する章の報告②（「研究計画書」に基づく、博士論文を構成する章（少なくとも1章）の報告）、査読付論文（研究年報含む）への投稿に向けた報告・指導</p> <p>第7回 博士論文を構成する章の報告③（「研究計画書」に基づく、博士論文を構成する章（少なくとも1章）の報告）、査読付論文（研究年報含む）への</p>

	<p>投稿に向けた報告・指導</p> <p>第 8 回 博士論文を構成する章の報告④（「研究計画書」に基づく、博士論文を構成する章（少なくとも 1 章）の報告）、査読付論文（研究年報含む）への投稿に向けた報告・指導</p> <p>第 9 回 論文執筆指導①（執筆したサーベイ論文と、博士論文を構成する論文に対する指導を受ける）</p> <p>第 10 回 論文執筆指導②（執筆したサーベイ論文と、博士論文を構成する論文に対する指導を受ける）</p> <p>第 11 回 博士コース中間報告会の準備①（提出論文および、発表スライドの報告）</p> <p>第 12 回 博士コース中間報告会の準備②（提出論文および、発表スライドの報告）</p> <p>第 13 回 博士コース中間報告会の準備③（提出論文および、発表スライドの報告）</p> <p>第 14 回 博士コース中間報告会のフィードバック（博士コース中間報告会での指摘事項の整理）</p> <p><後期></p> <p>第 15 回 「研究計画書」の再検討の結果報告（「研究計画書」の再検討の結果報告、およびそれに基づく、現状の研究成果を報告する）</p> <p>第 16 回 先行論文サーベイと研究報告①（「研究計画書」に基づく、先行論文サーベイと、研究の位置付けの報告）</p> <p>第 17 回 先行論文サーベイと研究報告②（「研究計画書」に基づく、先行論文サーベイと、研究の位置付けの報告）</p> <p>第 18 回 先行論文サーベイと研究報告③（「研究計画書」に基づく、先行論文サーベイと、研究の位置付けの報告）</p> <p>第 19 回 博士論文を構成する章の報告①（「研究計画書」に基づく、博士論文を構成する章（少なくとも 1 章）の報告）</p> <p>第 20 回 博士論文を構成する章の報告②（「研究計画書」に基づく、博士論文を構成する章（少なくとも 1 章）の報告）</p> <p>第 21 回 博士論文を構成する章の報告③（「研究計画書」に基づく、博士論文を構成する章（少なくとも 1 章）の報告）</p> <p>第 22 回 博士論文を構成する章の報告④（「研究計画書」に基づく、博士論文を構成する章（少なくとも 1 章）の報告）</p> <p>第 23 回 論文執筆指導①（執筆したサーベイ論文と、博士論文を構成する論文に対する指導を受ける）</p> <p>第 24 回 論文執筆指導②（執筆したサーベイ論文と、博士論文を構成する論文に対する指導を受ける）</p> <p>第 25 回 博士コース中間報告会の準備①（提出論文および、発表スライドの報告）</p> <p>第 26 回 博士コース中間報告会の準備②（提出論文および、発表スライドの</p>
--	--

	<p>報告)</p> <p>第 27 回 博士コース中間報告会の準備③ (提出論文および、発表スライドの報告)</p> <p>第 28 回 博士コース中間報告会のフィードバック (博士コース中間報告会での指摘事項の整理)</p> <p>※ 実際の研究調査の進め方は担当教員によって変わる可能性があります</p> <p>教員によっては MBA 課程の学生等との合同指導やディスカッションなどが行われることもある。実施形式等は受講生と指導教員で相談して決定する。</p> <p>・アクティブ・ラーニング要素</p> <p>■ディスカッション、□グループワーク、■プレゼンテーション、■実習、□フィールドワーク、□PBL (課題解決型学習)、□反転授業 (教育の中で行う授業学習と課題などの学習外学習を入れ替えた学習形式、□ディベート、□その他 ()、□実施していない</p> <p>・(ICT を活用した) 双方型授業の実施</p> <p>■平日夜間オンライン授業 : ZOOM</p> <p>■土日対面授業実施</p> <p>□クリッカー、□タブレット端末、□その他 ()</p>
成績評価の基準と方法	<p>成績評価は、学会発表、査読付き雑誌への論文投稿などの研究成果や進捗状況、セミナーへの出席や論文発表などの研究活動、研究の進捗状況や態度によって決定されます。</p> <p>※出席は前提であり、出席だけでは評価点となりません。</p> <p>・課題 (中間試験やレポート等) に対するフィードバックの方法</p> <p>■授業時間内で講評・解説の時間を設ける</p> <p>・授業で使用する言語</p> <p>■日本語 ■英語 □ (その他)</p>
テキスト・参考文献等	<p>特に指定しません。必要に応じて指導教員が紹介します。</p>
特記事項	<p>指導教員の方針や受講生の要望あるいは進行状況によって、適宜、授業計画が修正されることがあります。</p>

科 目 名	研究指導 III
担 当 者	阿部 誠、生稲 史彦、石島 博、犬飼 知徳、金 雲鎬、島貫 智行、 新藤 晴臣、杉浦 宣彦、高村 静、竹田 陽子、露木 恵美子、遠山 亮子、 中村 博、真野 俊樹、杉浦 宣彦
履 修 条 件	研究指導 II を履修済みであること
科 目 の 目 的 ・ 到 達 目 標	<p>目的：研究指導 III は、博士論文執筆を計画的かつ着実に進め、博士課程の各段階において求められる研究水準に達することを目指す。毎回の研究報告や文献輪読等に対して、指導教員から助言および批判を受けつつ、高度な専門知識を習得していくことを目的とする。</p> <p>目標：博士課程の各段階の評価に当たって合格に値する学識・技術の高度な専門性を習得すること。特に、研究指導 III では、「博士論文の全体構成と主要な部分（章）に該当する研究」論文の執筆をし、博士論文の完成を目指す。</p> <p>この科目（DBA）では4つの能力のうち以下の能力の涵養を目指す：◎1：戦略経営に関する学術的知見、◎2：研究方法論に関する深い理解、◎3：実務上の課題を設定し解決する能力、◎4：体系化された研究を実行できる知識・能力、</p>
概 要	研究指導 III では、3年次に求められる水準の「博士論文の全体構成と主要な部分（章）に該当する研究」論文の執筆を目指す。指導教員と相談しつつ、博士論文を構成する研究内容を学会で研究発表したり、査読付き学術誌に論文を投稿したりすることに向けての計画・準備を進める。
授 業 計 画	<p><前期></p> <p>第1回 「サーベイ報告書と構成章（論文）」の再検討の結果報告（「サーベイ報告書と構成章（論文）」の再検討の結果報告。それに基づいて、現状の研究成果を報告）</p> <p>第2回 全体構成の提示①（「研究計画書」と「サーベイ報告書と構成章（論文）」に基づき、博士論文全体の構成について報告）</p> <p>第3回 全体構成の提示②（「研究計画書」と「サーベイ報告書と構成章（論文）」に基づき、博士論文全体の構成について報告）</p> <p>第4回 全体構成の提示③（「研究計画書」と「サーベイ報告書と構成章（論文）」に基づき、博士論文全体の構成について報告）</p> <p>第5回 主要章の報告①（全体構成に基づく、博士論文の主要章の報告）</p> <p>第6回 主要章の報告②（全体構成に基づく、博士論文の主要章の報告）</p> <p>第7回 主要章の報告③（全体構成に基づく、博士論文の主要章の報告）</p> <p>第8回 論文執筆指導（①執筆した主要章の指導を受ける）</p> <p>第9回 論文執筆指導（②執筆した主要章の指導を受ける）</p>

<p>第 10 回 論文執筆指導③（執筆した主要章の指導を受ける）</p> <p>第 11 回 博士課程中間報告会の準備①（提出論文および、発表スライドの報告）</p> <p>第 12 回 博士課程中間報告会の準備②（提出論文および、発表スライドの報告）</p> <p>第 13 回 博士課程中間報告会の準備③（提出論文および、発表スライドの報告）</p> <p>第 14 回 博士課程中間報告会のフィードバック（博士コース中間報告会での指摘事項の整理）</p> <p><後期></p> <p>第 15 回 「サーベイ報告書と構成章（論文）」の再検討の結果報告（「サーベイ報告書と構成章（論文）」の再検討の結果報告。それに基づいて、現状の研究成果を報告）</p> <p>第 16 回 全体構成の提示①（「研究計画書」と「サーベイ論文と構成章（論文）」に基づき、博士論文全体の構成について報告）</p> <p>第 17 回 全体構成の提示②（「研究計画書」と「サーベイ論文と構成章（論文）」に基づき、博士論文全体の構成について報告）</p> <p>第 18 回 全体構成の提示③（「研究計画書」と「サーベイ論文と構成章（論文）」に基づき、博士論文全体の構成について報告）</p> <p>第 19 回 予備審査発表会の準備①（提出論文および、発表スライドの報告、全体構成に基づく、博士論文の主要章の報告）</p> <p>第 20 回 予備審査発表会の準備②（提出論文および、発表スライドの報告、全体構成に基づく、博士論文の主要章の報告）</p> <p>第 21 回 予備審査発表会の準備③（提出論文および、発表スライドの報告、全体構成に基づく、博士論文の主要章の報告）</p> <p>第 22 回 予備審査発表会のフィードバック（博士コース中間報告会での指摘事項の整理）</p> <p>第 23 回 論文執筆指導①（執筆した提出論文の修正指導を受ける）</p> <p>第 24 回 論文執筆指導②（執筆した提出論文の修正指導を受ける）</p> <p>第 25 回 公聴会の発表準備①（提出論文および、発表スライドの報告、全体構成に基づく、博士論文の主要章の報告）</p> <p>第 26 回 公聴会の発表準備②（提出論文および、発表スライドの報告、全体構成に基づく、博士論文の主要章の報告）</p> <p>第 27 回 公聴会の発表準備③（提出論文および、発表スライドの報告、全体構成に基づく、博士論文の主要章の報告）</p> <p>第 28 回 公聴会のフィードバック（博士コース公聴会での指摘事項の整理）</p> <p>※ 実際の研究調査の進め方は担当教員によって変わる可能性があります</p> <p>教員によっては MBA 課程の学生等との合同指導やディスカッションなどが</p>

	<p>行われることもある。実施形式等は受講生と指導教員で相談して決定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アクティブ・ラーニング要素 <ul style="list-style-type: none"> ■ディスカッション、□グループワーク、■プレゼンテーション、■実習、□フィールドワーク、□PBL（課題解決型学習）、□反転授業（教育の中で行う授業学習と課題などの学習外学習を入れ替えた学習形式、□ディベート、□その他（ ）、□実施していない ・（ICT を活用した）双方型授業の実施 <ul style="list-style-type: none"> ■平日夜間オンライン授業：ZOOM ■土日対面授業実施 □クリッカー、□タブレット端末、□その他（ ）
成績評価の基準と方法	<p>成績評価は、学会発表、査読付き雑誌への論文投稿などの研究成果や進捗状況、セミナーへの出席や論文発表などの研究活動、研究の進捗状況や態度によって決定されます。</p> <p>※出席は前提であり、出席だけでは評価点となりません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題（中間試験やレポート等）に対するフィードバックの方法 <ul style="list-style-type: none"> ■授業時間内で講評・解説の時間を設ける ・授業で使用する言語 <ul style="list-style-type: none"> ■日本語 ■英語 □（その他）
テキスト・参考文献等	<p>特に指定しません。必要に応じて指導教員が紹介します。</p>
特記事項	<p>指導教員の方針や受講生の要望あるいは進行状況によって、適宜、授業計画が修正されることがあります。</p>



中央大学ビジネススクール

(大学院戦略経営研究科)

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3丁目11-5

TEL 03-6261-8522

FAX 03-6261-8530

https://www.chuo-u.ac.jp/academics/pro_graduateschool/business/dba/